

第 1 回熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター講演会

「有明海・八代海の環境研究」

有明海・八代海は、海苔、真珠、車エビ、ハマチ、ヒラメなどの養殖、アサリなどの採貝のための漁場として利用されてきました。しかし、ここ数年は、赤潮の発生、養殖魚介類の大量斃死事故等が繰り返され、平成 12 年 12 月には有明海で大規模な海苔の色落ち現象も発生し、沿岸住民の生活に多大な影響を与えました。多大な経済的価値を有する有明海・八代海の環境変化は、沿岸地域の社会・経済にも密接に関係することから、環境悪化のメカニズムの解明、良好な干潟浅海域の保全は急務の課題といえます。海洋汚染の原因を探るためには、多様な海洋調査による現状の把握と環境の経年変化の把握が不可欠です。

今回、3 名の研究者をお招きして、最近の有明海・八代海の環境変化について、ご講演いただきます。多数の皆様の御参加をお待ちしております。

日時：2003 年 1 月 31 日 (金) 13:00 ~ 16:00

場所：熊本大学くすのき会館ホール 熊本市黒髪 2-40-1 (熊本大学黒髪北地区)

プログラム

13:00 ~ 開 会

13:10 ~ 講演 「赤潮原因プランクトンの最近の変化」

長崎大学水産学部 教授 松岡数充氏

(要旨) 諫早干拓事業では 1997 年 4 月 14 日に延長 7.05km の潮受け堤防を築くことによって、諫早湾奥部の 3550ha を締め切った。その内側のかつては干潟であったところを干陸化して農地とし、その前面を農業用水と洪水制御等を目的とした防災用の調整池とする計画であった。この事業は 1989 年に着工された。その時期と前後して諫早湾ではタイラギやアサリなどの漁獲高の減少や

赤潮観察件数が増加するようになった。さらに最近では有明海中北部を中心に2000年12月から2001年3月にかけて、浮遊性珪藻 *Rizosolenia imbricata* を優占種とする大規模珪藻赤潮によって養殖ノリに著しい色落ちが発生し、養殖ノリ産業に大きな経済的打撃をあたえた。これを契機として有明海に発生する赤潮に関心が向けられるようになった。

赤潮の多発化と大規模化は、潮受け堤防によって諫早湾が縮小されたこと、さらに調整池からの排水との関連で議論がなされつつある。がその一方で、このような現象は潮受け堤防構築が直接的な影響ではないとする見方もある。有明海全体で見ると、珪藻類を原因種とする赤潮が多いのに対して、諫早湾では渦鞭毛藻類やラフィド藻類の赤潮が多発する傾向にある。小論では、諫早湾で発生した赤潮の記録を基に、諫早湾における赤潮の発生特性を最近の環境変化との関連で考えてみる。

14:00 ~ 休憩

14:10 ~ 講演 「有明海の干潟は元気か」

島根大学総合理工学部 教授 石賀裕明氏

タイトル：

(要旨) ガタリンピックが行われるように有明海の干潟の泥はとても元気(きれい)である。これは多様な生物による浄化作用が行われ、有機物が蓄積しない環境にあるためである。しかし、このような自然の環境は次第に失われて、有機物が分解されない環境へと変化すると大変である。環境の変化を調べるために干潟の泥に含まれる元素、とくに重金属元素の濃度を調べている。これらは有機物が分解されなくなるとそれらに結びついてどんどん濃度を上げていく。講演ではお隣、韓国の干潟とも比較を行いながら有明海の干潟の現状について説明する。

15:00 ~ 休憩

15:10 ~ 講演 「底生有孔虫から水銀汚染を探る」

鹿児島大学総合研究博物館 教授 大木公彦氏

(要旨) 南部八代海から採取した 62 点の海底表層堆積物の粒度組成とそれらの柱状コア試料に含まれる水銀の垂直・水平分布を調べることによって、この海域の水銀を含む堆積物の拡散の過程が明らかになった。また、水俣市に近い 5 地点において、柱状コア試料の、水銀汚染以前と以後の底生有孔虫群集の組成を調べたが、5 地点のすべてで *Bulimina denudata* の産出頻度が汚染後に高くなった。これらの研究結果と、今後の環境調査の在り方について述べたい。

16:00 閉 会

参加費：無料です。

申込み：定員 80 名です。当日、先着順で受け付けます。

連絡先：

〒860-8555

熊本県熊本市黒髪 2-39-1

熊本大学総務部研究協力課

森 良徳

: 096-342-3143 (直通)

E-mail : y-mori@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター

秋元和實

: 096-342-3426 (直通)

E-mail : akimoto@sci.kumamoto-u.ac.jp